

▼鑑：『莊子』「秋水」の故事。

南方有鳥、其名鵯鵯、子知之乎。夫鵯鵯發於南海、而飛於北海。非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飲。於是鴟得腐鼠、鵯鵯過之。仰而視之曰、嚇。今子欲以子之梁國而嚇我邪。

〔口語訳〕

「南方の地に鵯鵯という名の鳥がいる。君はご存知だろうか。その鵯鵯という鳥は、はるか南方から飛び立って北海に飛び渡るのだが、あお桐の木でなければ止まらないし、竹の実以外は食べないし、甘泉の水以外は飲まないのだ。ところが一羽のふくろう（又は、とび）が腐った鼠を手に入れたところへ、ちやうど鵯鵯が通りかかった。するとふくろうは上を向いて鵯鵯を見、（鼠を取られはしまいかと）かあつと鳴いて脅したということだ。ところで今君は梁國の宰相の地位を奪われはしまいかと恐れて、この私を脅そうとでもするのかね」

補説③

○95句目「遇境虚生白」の句に込められている「遇境」についての考察
道真の作品中には、つぎのような用例が見える。

▼『菅家文章』

「30 戊子之歳、八月十五夜、陪月臺、各分一字 探得登」

詩人遇境感何勝、秋気風情一種凝

「177 南園試小楽」

遇境偷閑喚管絃、餘霞断處落花前